書評・紹介

Daniel Noin and Robert Woods (Eds.)

The Changing Population of Europe

Blackwell, Oxford UK & Cambridge USA, 1993, xvi＋260pp.

本書はヨーロッパ共同体（ＥＣ，現在は欧州連合，ＥＵ）諸国の近年の人口動向を多方面から描こうとした概説書である．編者のパリ第一（ソルボンヌ）大学地理学科のDaniel Noin教授はＩGU（国際地理学連合）の人口地理学委員会の委員長であり，リバプール大学地理学科のRobert Woods教授は河邊宏他訳『地域人口分析法』（古今書院）の著者として日本でもおなじみの人口地理学者である．18章から成る本書の分担執筆者の大半はＩＧＵの人口地理学委員会で活躍しているヨーロッパ各国の地理学者と人口学者であり，担当分野において代表的な研究者として知られるような執筆者も含まれている．

各章について詳しく検討する紙幅の余裕がないので，以下に章のタイトルだけを挙げておく．

第１章　ＥＣの人口
第２章　人口の発展過程－緩慢な成長－
第３章　人口の地理的分布と都市化
第４章　死亡率の空間的不平等
第５章　出生率－世界最低水準－
第６章　出生政策－限定的な効果？－
第７章　男女・年齢構造
第８章　人口学的加齢－傾向と政策的対応－
第９章　家族構造
第10章　教育
第11章　雇用の地理学
第12章　失業－男女・年齢別にみた失業率の地域差－
第13章　脱工業化社会における女性の役割
第14章　ＥＣ内部の人口移動
第15章　外部からＥＣへの人口移動
第16章　人口移動政策
第17章　ヨーロッパにおけるエスニック・マイノリティのコミュニティ
第18章　後記　－ひとつのヨーロッパの中の様々な人口問題－

記述の方法は，オリジナルの図表を示しながら論じるタイプ，既存の研究を整理しながら議論を進めるタイプなど，執筆者によって異なるが，一貫して目立つのは国と国との比較という視点である．人口学者からは比較ばかりで人口そのものに関する本質的な議論が少ないとの批判を受ける可能性もあるが，比較によって説明は一層具体的になり，一般の読者の理解を容易にしているのも確かである．ＥＣ諸国は比較という方法が成り立ちうる国家の集まりであることを再認識させられた．

内容に関しては，本書の意図が新たな事実や新しい方法の提示よりも，既存の知識の整理に重点を置いているため，とりたてて目新しいものはないように感じられた．だが，各章が図表を多く用いて，基本的な事実をきっちりと論じているので，評者自身，理解を新たにさせられた箇所（例えば，ＥＣ内の失業率の地域差の地図など）がいくつもあった．ただし，章によっては担当者の専門分野と本書での分担が一致していないのか，記述が表面的な箇所も見られた．

本書のなかで評者がとりわけ関心をもって読んだのは，第14章以下の人口移動に関する部分であるが，ここでは，ＥＣ内の自由な労働力移動について楽観的な認識が現状および将来に対してなされている点，アフリカ諸国などから南欧（スペインやイタリアなど）への人口移動（不法入国が多い）が新たな問題として指摘されている点が特に印象に残った．一方，14章から17章の記述には重複が少なからずあることが気になった．ちなみに13章以前には記述の重複はほとんどなく，執筆者間の分担の調整が非常にうまくできている．

かつてＥＣの中核の国々で見られた出生率低下や外国人の流入という現象が，現在ではイタリアやスペインなど南部の周辺諸国で大きな問題となっていることが本書から読みとれるが，これは我々が従来からイメージとして抱いていたＥＣ諸国の空間的構図が近年変化しているということであろう．ＥＣの人口問題の入門書として，特にＥＣ諸国の地域研究に関心のある読者に奨めたい．

（中川聡史）